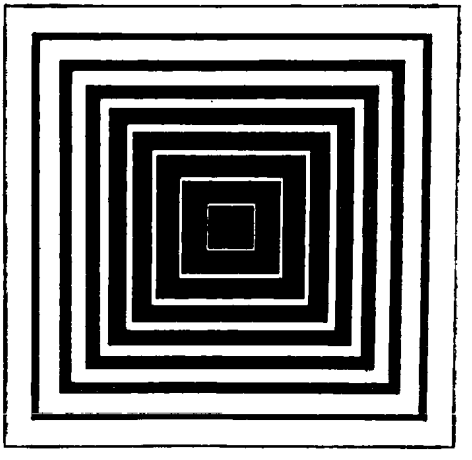
保元物語・平治物語
義経記

井伏鱒二・高木 卓訳



日本の古典—14

河出書房新社

日本の古典 14

保元物語
平治物語
義経記

昭和四十九年十二月十日　初版印刷
昭和四十九年十二月二十日　初版発行

訳　者　井伏鱒二
　　高木　卓

装幀者　亀倉雄策

発行者　中島隆之

発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話　東京(292)三七一一(大代表)　振替　東京一〇八〇二

印　刷　凸版印刷株式会社

製　本　加藤製本株式会社

製　函　加藤製函印刷株式会社

本文用紙　本州製紙株式会社

クロス　日本クロス工業株式会社

定価は帯に表示してあります

©1974

平泉・北上川と高館（「義経記」）

目次

保元物語・平治物語・義経記

保元物語
平治物語……井伏鱒二訳 一九
義経記……高木卓訳 一四九
〈作品鑑賞のための古典〉
慈円
愚管抄……栃木孝惟訳 三七

解説 杉浦明平 三
解題 犬井善壽 三九
注釈 池田弥三郎 三四一
年表 犬井善壽
挿画 平治物語 栃木孝惟 三五三
義経記 羽石光志
安田靫彦
前田青邨
カット 羽石光志
解説写真 榊原和夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

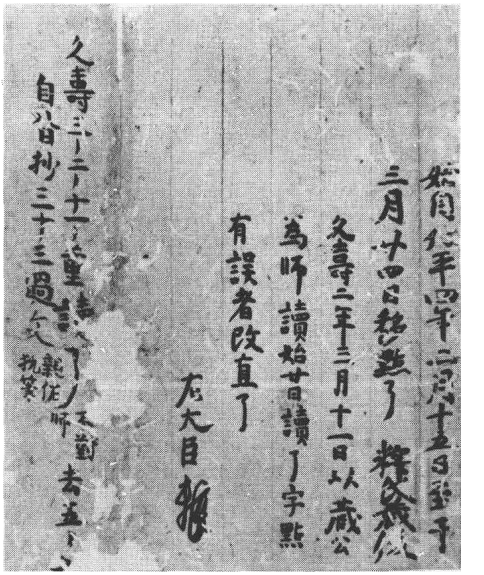
解説

軍記物語——その出発と爛熟

『保元物語』『平治物語』に続くのは、かの軍記物語の王ともいうべき『平家物語』であり、『義経記』はその『平家』に欠けたところを補足するとともに、『平家』の終ったところからさきが、いささかながら、書き継がれている。そういう意味で、この巻に収められた三篇は『平家物語』前史と補遺とから成っているといえなくもない。もっとも三つの物語とも、いろんな異本があって、中には『平家』と重複する記述をもった本もあるようだが、現在印刷されている本では、ほとんど重複のないように編まれている。したがって『保元物語』からはじまって『平家』を経て『義経記』における義経の最期まで一連の通し物語として読むことができる。保元の乱の勃発した保元元年(一一五六)から義経が殺され奥州藤原氏が滅ぼされた文治五年(一一八九)までは足かけ三十四年だから、それほど長い期間ではないけれど、そのみじかいあいだに、源為義や鎮西八郎為朝、藤原頼長、信西、信頼、義朝、清盛、重盛、義仲、義経、平家一門と、おびただしい主役が歴史の舞台に登場したかとおもうまもなく、たちまち姿を消していった。それが革命動乱期の特徴の一つであるが、ともかく主役のうちでその転形期を生きぬきえたのは、後白河法皇と源頼朝の二人だけではなかったろうか。それをやや離れて眺めていた人がいたとしたら、

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし。」(鴨長明「方丈記」)

という感慨を催さざるをえなかったであろう。清盛も義仲もたれもかれもたまゆら浮かびあがってはじけ消え去る泡の一つにすぎなかった。この三十四年を生きぬいた後白河法皇と頼朝さえ、義経らの死後幾年ならずして消えうせたのだから、やはり水泡にすぎなかった。そういう無常観をさそわずにはすまぬ三十余年が流れていたのである。もちろん、その浮かんでは消える泡の中には、後白河法皇をはじめ、天皇や上皇、頼長や信西のような貴族官僚もまじっているけれど、その大部分は源平両家とそれに服属する武士たちであるとことわるまでもない。



「保元の乱」一方の雄・左大臣頼長自筆の書。頼長は当時宮廷第一の器量人で、あらゆる方面に才能を発揮したが書に関しては「筆蹟の美しさなど、その場の興を添えるだけのものだ。賢臣たるものの致すべきものではない」と兄・関白忠通を非難したと本文にもある。

がしかしその源平の主役たちも消えさったあとには、この動乱のあいだ、ごく稀れにチョイ役としてしか顔を出すことのなかった伊豆の豪族北条氏が大きく姿をあらわして、権力を独占しているのを見いだす。が、それはこの『平家物語』一族の物語が語りつくされた後の時代に属する。

さて、『保元物語』以前には、古代日本の政治的中枢だった京都に戦争らしい戦争が起ったことはなかった。だからといって、権力をめぐる闘争が存在しなかったというわけではない。宮廷や摂関家の奥では、はなやかな王朝文化によそわれながら、権謀術策による陰湿な権力闘争が無慈悲に展開されていたが、この場合、暴力（武力）はごく巧妙にかつ小規模にしか用いられなかった。そのために、草深い地方に生長しつつあった武士は自分のもつ力を意識する機会にめぐまれることがなかったのである。武士の統領源氏平家の家長といえども、都にのぼれば、上層貴族にとっては、田舎の一介の従者にすぎなかったし、武士じしんもそれに甘んじる以外にはなかった。

しかし都を遠くはなれれば、とりわけ、番役を終って東国にもどれば、どの武士も新しく開発した広大な耕地の主であって、十数名ないし数十名の一族郎党を擁して、馬で山野を駆けめぐり、鳥獣を狩り、ときには隣りの同様の地主と武闘をもあえて辞せぬたくましい戦闘心をもっていた。こういう武士の肖像は『今昔物語』にヴィヴィッドに写しとられている。換言すれば、『今昔物語・本朝篇』を読めば、『保元物語』に名前をつらねる源平両氏に属する戦士たちの国元での生活がほぼあきらかになる。源充、平良文、平維茂などのたくましいたたかいぶりを見れば、いかに実力がたくわえられてきたか、瞭然といえよう。

「平治の乱」に敗れて尾張まで落ちのびながら長田忠致の裏切りによって、主君・義朝に殉じ討死にした鎌田正家とその妻の墓。妻は長田忠致の実の娘であったが、父親を恨んで自害した。二人の墓は次ページの義朝の廟の近くに、今も残されている。

にもかかわらず、実力をそなえてきた地方の武士たちはかわいた砂のようにバラバラであって、せいぜい血縁関係くらいしかお互どうしのつながりをもたなかった。その血縁さえ二、三代経過すれば、薄らいで、むしろ領地相続紛争の種となった。平氏の末は平氏どうし、源氏の裔は源氏どうし、争いの絶えることはなかったのである。もっとも絶えず争うことによって、かれらの武力は一段と強化されていった。

むろん、かれらにはまだ武士階級としての理念など育っていなかった。ただやみくもに成長してくるエネルギーを周囲の仲間にぶっつける以外のことを知らなかったといっていい。がしかしそういうかれらも武力だけでは安定した勢力を保ちえないことを感じて、自分たち仲間を超越する権威を求めずにはいられなかったとしてもふしぎではある

源氏の頭領・源義朝の廟。愛知県知多郡野間の後白河天皇による勅願寺・大御堂寺に祀られてある。この地は、義朝が横死した土地として名高い。
義朝は三十八歳で死んだが、その息子としてのちに天下をとる頼朝や英雄児・義経を残した。

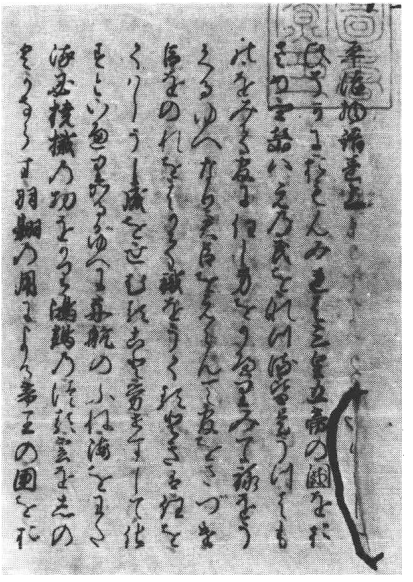
まい。その目ざしたのは、律令制時代いらい爛熟した伝統的文化と政治権力をもっている都の天皇・院・摂関家であった。

かれらは、徴用されればよろこんで上京、皇宮の門衛をつとめ、摂関家のお供廻りをうけたまわり、その代償として六位以下の最低の官位をもらえば、こよない名誉と信じて疑わなかった。そういう肩書の権威によって、田舎において、近隣の同輩を圧倒しうるように錯覚していたのだ。その錯覚はほとんどすべての武士に共有されていた。そのかぎりでは、かれらは貴族の家来にすぎず、いつその低い地位から抜け出せるやら、何の見通しもつかなかったのである。

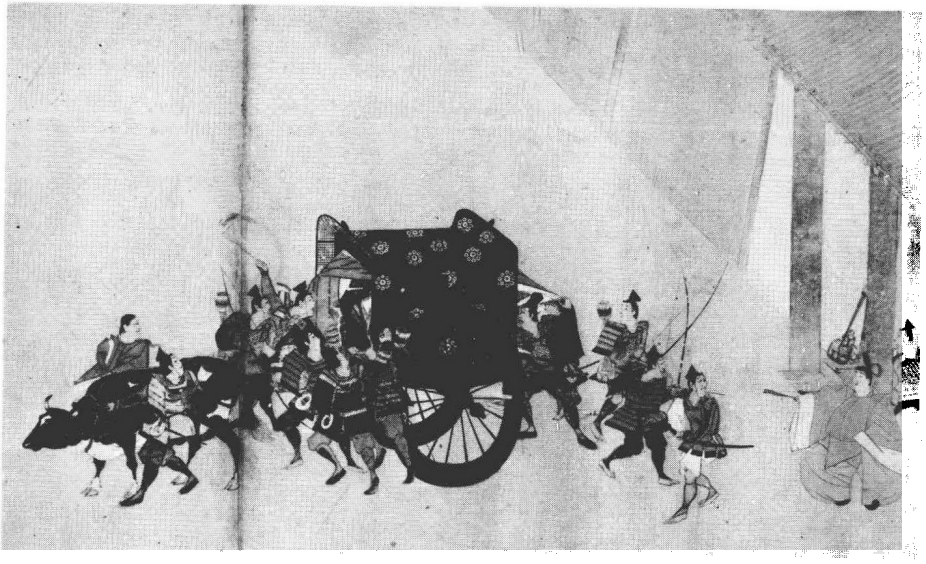
こういう低迷状態から武士を目覚まし、自己の力を自覚させたのが、じつに保元の乱にほかならなかった。

保元以前にも、武士どうしの対立が相当に大規模の戦争となり、ときには中央政府のきびしい搾取にたいする地方有力者の反抗が内乱に似た形をとったことがないではなかった。古くは将門や純友の乱、前九年の役と後三年の役はいちじるしく目立った戦だったが、小規模の戦闘ともなれば、無数に起ったと考えてよかろう。が、そういう戦争・内乱・暴動はほとんどすべて中央政府の統制力のよわい地方とりわけ関東・東北あるいは九州に勃発したのであって、都はしばしば僧兵に悩まされはじめたし、凶作の年には羅生門界隈に強盗の出没が目立ったとはいえ、おおまかにいえば、泰平で戦火の閃きは見られなかったといってもまちがいではなかろう。政権の争奪は主として宮廷内の権謀術数によっておこなわれていた。しばしばクーデターに近い形をとったこともないではなかったけれど、その武力は質量ともにかすかなもので、文弱の徒にすぎぬ宮廷人を脅かして、その意志を喪失させてしまえばたりたのである。

ところが為政者階級が実質的な政治活動から浮き上がるにつれて、権力をめぐる闘争の方は一段と深刻化せざるをえなかった。闘争そのものが自己目的となって、あらゆる陰謀や術策が駆使されつくされると、残された手段は暴力による決着つまりクーデター以外にはなくなったのである。もっともクーデターは、正々堂々たる政治的決戦というより公卿式の権謀術数の一つの手として利用されたのだが、嘘から出たまことで、本当の合戦にまでなってしまった。そのおかげで、今まで関東や九州の僻地を駆けまわっていた武士たちははじめて都の本舞台に登場するめぐりあわせになった。貴族たちの手先として登場させられたのに、幕が開かれてみると、貴族たちは後方に退いて、武士たちの花々しい活動が舞台一ぱいを占める結果を見たのであった。



「平治物語」の古写本。この物語の成立年代は鎌倉時代の初期と推定されているが、古写本もその頃のものと思われる。



○

その意味で『保元物語』は、源平両氏の武士たちの初舞台のはれがましさをうたいあげた一篇といってよいだろう。もちろん、騒乱の火種は、宮廷の相続争いに摂関家の兄弟喧嘩が加った些細なもので、王朝を通してしょっちゅう繰り返されてきたところであり、よもやあんなに燃え上がろうと当人たちも予想しなかったにちがいない。（応仁の乱でも同じような火種から、あの大乱がおこった。）

ただ保元の乱を平治の乱とくらべると、こちらの方が主役に一流役者が揃っていたかもしれない。崇徳上皇方の総指揮者たる宇治の左大臣いわゆる悪左府藤原頼長は、兄の関白忠通よりも才はじけていて、学殖もゆたかで「和漢の礼義をととのへて、自他の記録に闇からず。諸道に深浅をさぐり、諸車に浮沈をはかり、万機に補佐として親疎なかりき。摂籙の臣たること、古今をはぢ給はず」といわれており、書の巧みなのが取りえの、おっとりした兄にくらべて、政治家としても峻烈かつ公正であった。それだけに敵も多かったということになろう。

これにたいして後白河天皇の黒幕は、やはり能吏というより循吏というべき下層官僚出身で学識に富む信西だった。学者としては頼長に一籌を輸するかもしれぬが、下級役人として苦労を積んできただけに現実の問題に対するさいは理想主義者というよりリアリストだった。そしてこの保元の乱の勝敗を決定したのは、信西の現実感覚であったといってよかろう。もともと、最大の実力者だった鳥羽法皇の庇護をうけていた後白河天皇派の方が、冷飯食いの崇徳上皇派よりはるかに勢力は強大だった。それだけに、上皇方の策戦会議で為朝が主張したように、奇襲によるクーデター以外に勝利の道はなかったであろう。ところが和漢

「平治物語」絵巻。多くの絵巻物の中でも第一級の作品といわれている。この場面は六波羅行幸の巻に収められている。

『誰の御車か』

と家忠が訊いた。

『貴い女官と侍女のお出ましだ。惟方が御供だから、別に仔細はない筈だ』

と惟方が返答した。しかし、金子はなお怪しんで、弭で御簾を掻き上げると、松明をふりかざしながら中をのぞいた……」

源氏側から平家側に運が移り出した場面である。

の故事に通じ、格式礼儀をもっともとうとぶ最上層貴族の頼長は、その為朝の案を「夜うちなどいふ事は、十騎廿騎のわたくしいくさなどの事也。さすがに主上・上皇の国争ひに、夜うちなんどしかるべからず。就中今度の合戦に、源平両家の名を得たる兵ども、数をつくして両方に引きわかるる。故実を存じ、互に思慮をめぐらすべし。用意おろかにしてははなはだ叶ふべからず」と、一蹴してしまう。和漢の故事に通暁していただけに絶対的自信をもって発言されるから始末がわるい。たれひとり反対ができないのだ。クーデターを企てながら、形式的な手続きを踏んでゆこうとする自分の矛盾を感じるには生まれからいっても学殖からいってもあまりにも自信をもちすぎていたのである。

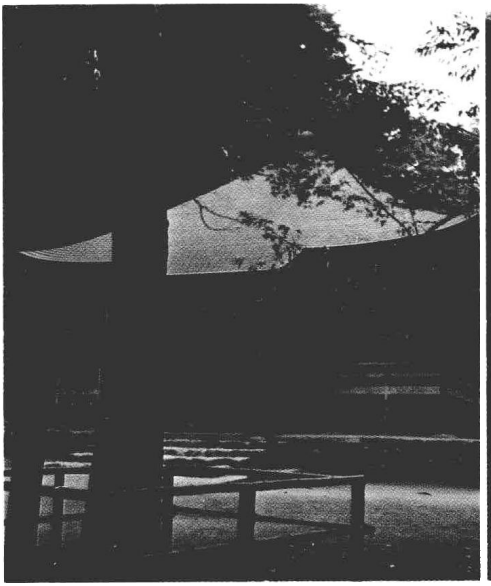
これにたいして、天皇側では、義朝の夜襲案にたいして、信西は「詩歌管絃は臣下（自分）のたしなむ所也。其道さへ猶以てくらし。いはんや武道にをきてをや。合戦の謀（はかりごと）におゐては、ひとへに汝を頼みおぼしめさる所也。就中先にする時は人を征し、後にする時は人に征せらるるといふ本文あり。敵の上手（うわて）をうつこともっともって肝心也。急ぎ罷（まか）り向ひ候へ」と即座に決断して、実行に移らせる。この決断が勝敗を決定した。というのは、じつは、この乱は、頼長の考えているような大戦争ではなく、クーデターにすぎなかったから、奇襲に成功したものが勝者として生き残りえたのである。このとき、義朝が昇殿――天皇のいる室の階段を昇るというつまらぬ動作にすぎない――を許されて感激しきっているのを見ると、まだ武士として実力を自覚しないおろかしさに一抹のあわれさをおぼえる。この感激は、乱の平定後、上の命令のままに、父為義をはじめ十余人の弟たちを一人残らず自分の手で斬るという弱さに通じ、さらに平治の乱における惨敗に通じている。

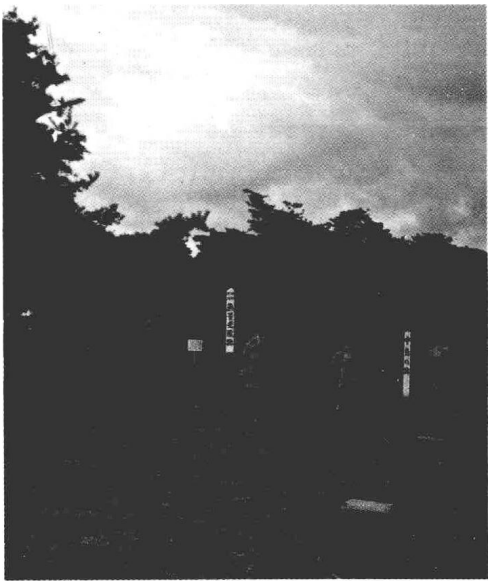
後に九郎判官義経となる牛若が、遮那王とよばれて七歳から十六歳まで預けられていた、京都・鞍馬寺の本殿。山深い鞍馬寺は、義経が天狗について修行したという伝説を生むにふさわしい土地であった。

それはさておいて、悪左府頼長と信西とが実際にこのような発言をしたかどうか確めるわけにはゆかぬ。いかにもありそうなこととして創作されたのかもしれぬが、この内乱の勝敗の機微をみごとにつかまえてみごとなリアリティをもっているとはいってよかろう。

こうして天皇側の奇襲で開始せられた戦闘は、この物語のもっとも花々しいヒーロー鎮西八郎為朝の目を見はる大活躍にもかかわらず、数時間にして上皇側の敗北をもって終結する。そして後半は、敗者とくに源氏の総領為義とそのたくさんの子供たちの悲惨な処刑哀話にみたされる。み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com





鞍馬を金売り吉次とともに逃れた牛若が、最後に辿りつき、その庇護を受けた奥州・平泉の覇者・藤原秀衡の建立した無量光院跡。この辺りに秀衡の館もあったといわれる。

藤原清衡にはじまり、基衡・秀衡と三代にわたり奥州に覇を唱えた藤原氏の菩提寺・中尊寺の経堂。この経堂は創立の頃から残っている建物である。中尊寺は金色堂と藤原三代のミイラで名高い。

ずから父や兄弟を殺して、義朝が孤立してゆき、ときにその殺される弟たちにそのことを予言させているのは、『平治物語』へのひそかな伏線であろう。保元の乱は数時間の戦闘で終ったけれど、ここに参加した武士たちに、武力（暴力）こそすべてを一刀両断の下に解決する力であることを自覚させた。その自信が次の平治の乱をひきおこす。というのぼ頼長のようなゆたかな学殖も、武力の前には三文の役にもたたぬことが、何よりもあざやかに証明されたからだ。

そういう武士のデビューであるだけに、それを謳った『保元物語』には、すべての事件や人物が、これから発展してゆくであろうすべての軍記物語においてより大きく、よりはなやかにあらわれる原核のように、凝結した美しい形をとっているのである。『平家物語』は壮麗であるけれど、事件や人物の無駄のない典型性においては、『保元物語』に及ばぬとさえいえないでもない。

○

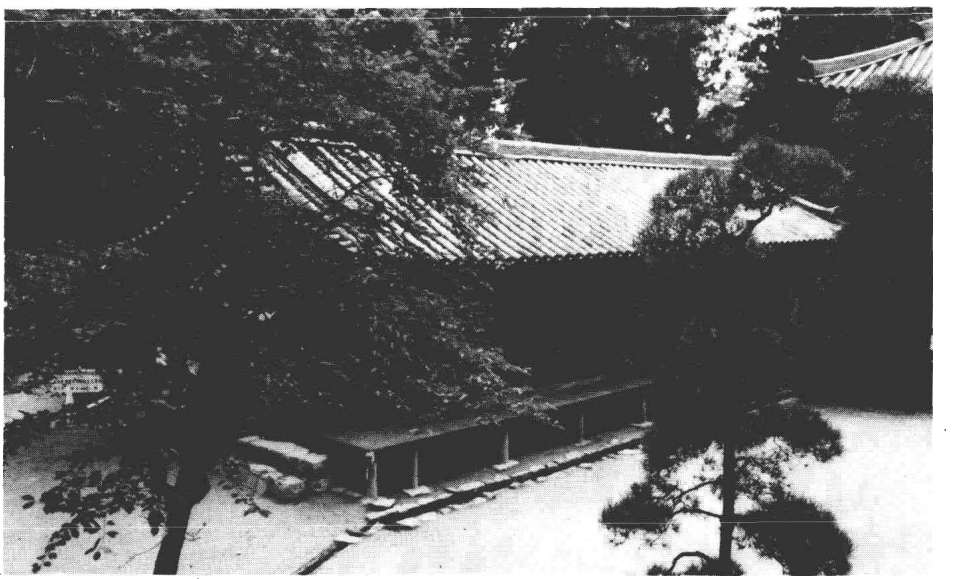
平治の乱はわずか二年の間をおいて勃発した。わたしはさきに、保元の乱で武士たちが自分の実力を自覚したといったが、考えてみればたった一回の体験で、二百年三百年にわたって精神の底にたまったおりから解放されるのは至難のわざであろう。なるほどかれらの武力によって、上皇や左大臣という途方もない高い地位にすわっている連中を押し倒すことができることを知ったけれど、自分じしんがそれに取ってかわり、自分の下に集る武士階級の利害を代表する政権を樹立しようと考えるまでには程遠かったとしても怪しむにあたらぬ。そうであるためには、まだまだ多くのにがい経験をなめなくてはならないのだ。

源義朝は保元の乱で武勲随一だったけれど、宮廷公卿か

ら見れば、武力をふるうのは野蛮行為以外の何ものでもなかったから、たいして高く評価されなくってもふしぎではない。しかも義朝は保元の変で上皇方についた父為義をはじめ肉親の兄弟のほとんど全部を自分の手で殺すというへまをしてしまった。為義も源氏の宗家としては、あまり政治的感覚をもたず、長男義朝をのぞく一家を挙げて上皇方に走り、義朝の功績で命だけ助けてもらえるつもりでのこのこ降参して斬られてしまったが、父だけでなく、行く行く頼りになるはずの弟たちまで斬ってしまった義朝もまた政治的感覚を欠いていたのである。為義は、日本六十数カ国の豪族の女に種を仕込んで源氏の繁昌をはかろうと企てたが、二十カ国足らずの女に子を生ませただけで終っただけでなく、せっかく営々と励んでこしらえた子のほとんどすべても保元の敗北で虐殺の憂き目を見なければならなかった。義朝も、関東の豪族の女や東海道の宿場の遊女たちにせっせと子種を仕込んだ点では父為義に劣らなかったけれど、政治的無能さでも父に似たりよったりだった。保元の乱で最大の手がらを立てながら、階段を昇る栄誉以外にたいした褒美ももらえず、父と弟たちをぎせいにするという最大の被害者になりおわった。

これにたいして平清盛は、おそらく白河法皇の落胤という相当確率性の高いうわさとその美貌と貴族的教育とのおかげで、宮廷や後宮から贔屓をうけていたのであろう。保元の乱でほとんど傷つかなかった一族を擁して、たちまち権力の座の近くまで上昇してしまった。引きはなされた義朝があせったのもまた無理からぬことであった。

しかし平治の乱そのものは、保元の乱以上にたわいないクーデターだった。清盛の熊野詣での留守をねらって上皇や天皇を幽囚したものの、敵の本拠六波羅を攻撃するでも



「義経記」で義経と並び活躍する弁慶が、一時修行した兵庫県・姫路の書写山・円教寺。弁慶による「書写山炎上」は有名な逸話であり、書写山には幾つかの弁慶ゆかりの遺品・遺跡が残されている。なお、円教寺は性空上人の開基になる天台宗の本山として著名である。左の建物が弁慶も学んだといわれる学問所、右に見えるのが奥の院である。

弁慶ゆかりの遺跡・遺品。右は顔にいたずら書きをされた弁慶が、顔を写したと伝えられる「弁慶の鏡井戸」。左は「弁慶の机」と呼ばれ、左右一・六メートル、重さ六〇キロの巨大なものである。

なく、むざむざ清盛の帰りを待っていたが、清盛が帰洛すると、ちっという間に勝敗は決してしまう。内側から裏切者が出て、せっかく囚えた上皇をも天皇をも脱出させてしまう間抜けぶり。保元のさいの方が、戦闘時間はみじかったけれど、双方とも精一ぱい力を出し切って緊張感にみちていたのに、今度のクーデターでは、悪源太義平の出場シーンをのぞいては、たいして花々しい合戦も展開されないうちに、義朝方は潰滅状態に陥ってしまう。何ともたるみきったクーデターであった。

それというのも、義朝の組んだ相手の藤原信頼があまりにもつまらぬ人物だったからであろう。保元の悪左府頼長は、軍事には通じなかったけれど、一廉の人物だったが、信頼の方はどうやら何の能力もないのに野心ばかり大きいおべんちゃら使いにすぎなかったのである。そういう小人物と肩を組んだ義朝もたいした総帥ではなかった。政治的に無能だっただけでなく、軍事的才能にもそれほどひらめきがあったようにも見えない。ただ十五歳の弱冠で、叔父帯刀先生義賢（たてわきせんじょうよしかた）（木曾義仲の父）を殺した悪源太義平ひとりが戦闘体験を積んでいて、花形となったのである。義平と重盛との一騎打ちがなかったら、『平治物語』は、もっぱら敗軍後の源氏一族の悲惨な末路を語ることに尽きたにちがいない。

そのせいか、『平治物語』は『保元物語』をパターンとしてつくられている。信西・信頼の対立は事実だっただろうが、ことさら『保元』の忠通・頼長のそれに似せてあり、義平の言動は為朝のそれのミニチュア版になっている。上にもふれたが、義平は悪源太（つまり手のつかぬ悪童である源氏の長男）と渾名せられたように、十五歳のとき肉親の叔父を攻め殺すなど、相当乱暴かつ野性的な若者

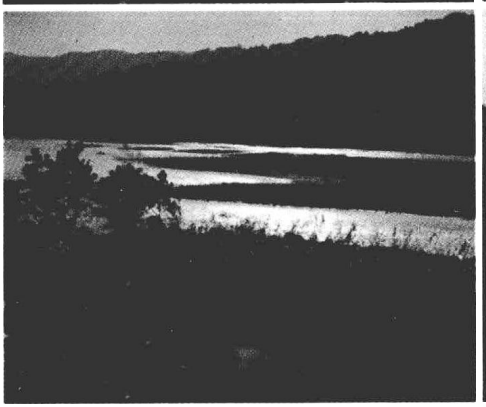
だったにちがいない。が、戦術会議で、熊野からもどる清盛を阿倍野で待伏せて倒そうという案を信頼に一蹴せられる話など、どう見ても、為朝の夜襲戦法を頼長が採用しなかった話から換骨奪胎されたのにちがいない。頼長の拒否には、きわめてリアリスティックな理由がついているのに、信頼は十分納得できるだけの理由を述べていない。信頼の頭がよくなかったせいといえなくはないが、それよりも『保元』の写しであったために、十二分な理由づけができなかったためと考える方がより妥当ではあるまいか。為朝は九州から矢前払の首頭九郎や三丁つぶての紀平二大夫などの奇怪な輩下をつれてきたのにたいして、義平の登場する場面には鎌田兵衛の下人八町の二郎という足の早い男があらわれて、馬で逃げる平重盛に追いつき、熊手を甲のてっぺんに打ちかけることになっている。こういう八町の二郎のようなバイプレイヤーでも出て来なければ、さっぱり生彩を欠いてしまったに相違ないとしても、この早駆の名人が三丁つぶての紀平二大夫をなぞってつくられたことはほぼまちがいなかろう。

とはいうものの、『保元』と読みくらべるとそのような制作の痕が目立つのであって、『平治物語』だけを切り離して読めば、それなりに小ぢんまりとまとまった前平家物語的内乱の様相をかなり活写しているといってよかろう。そのリアリティの一端はこの物語を裏づける乱そのものの事実の重さから伝わってくるのにちがいない。

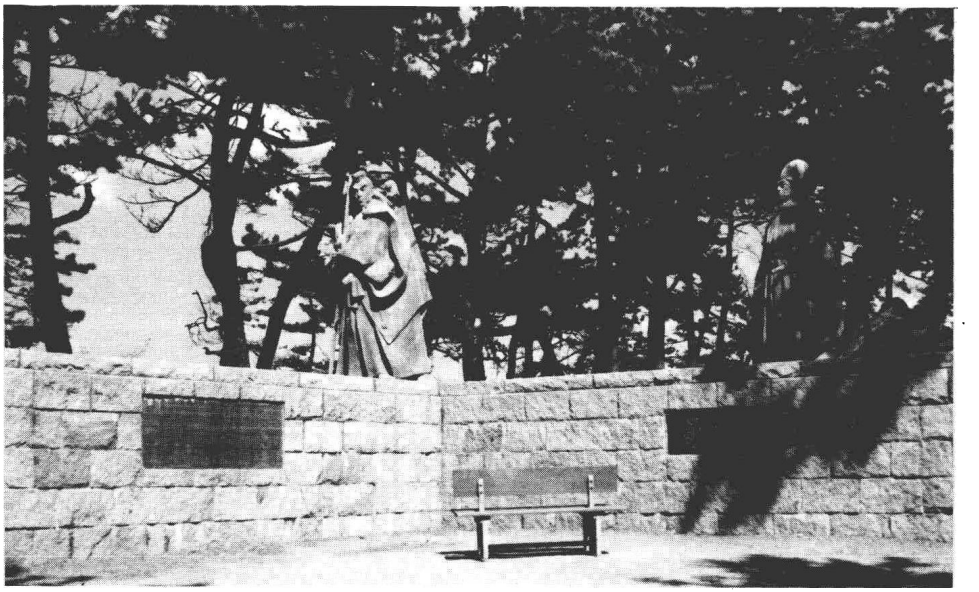
○

『義経記』は、さきにもいったように、平家物語群の補遺であり結びであって、一般に流布されている本では、『平家物語』との重複がないように細心に編集されてある。そしてその題名が示すとおり、源平合戦のヒーローである義経の一代記であるが、義経は『平治物語』の巻末近くで六波羅に自首する母常葉に抱かれた嬰児牛若として名前を見せるが、常葉のぎせいによって命を助けられたと述べられているだけで、活躍するには幼なすぎた。異本のなかには牛若の奥州下りまで述べた本もあるけれど、わたしたちの見る『平治物語』には、牛若の奥州下りは省かれているのがふつうのようだ。ところが『義経記』では、まず義朝の没落と常盤(こちらは「葉」でなくて「盤」と表記される)のことがごく簡略に述べられ、牛若は四つの年まで母のもとで養われ、それから七歳まで山科の源氏ゆかりのものの家で育てられたのち、鞍馬寺入りとなる。これから頼朝が立上って関東を制圧するまで二十年近く、歴史的には義経

平家の滅亡後、兄・頼朝の勘気を受けて、たちまち流浪の身となった義経の愛人・静御前は、やがて捕われ鎌倉に送られる。写真は、静が頼朝に強要されて舞いを舞った鎌倉・鶴ケ岡八幡宮の舞台。この時に静が義経を慕って歌った「しづやしづ　しづのをだまきくりかへし　むかしを今に　なすよしもがな」の歌はあまりにも有名である。



流亡の将・義経が、弁慶らと共に山伏姿で都落ちして奥州へ落ちて行った北陸の道筋。
写真右上より、琵琶湖北岸の海津の浜　福井との境の愛乳山付近
石川県石川郡鶴来町の白山比咩神社。
左上より、著名な古戦場である石川県河北郡の倶利伽羅峠　歌舞伎「勧進帳」のもとなった小矢部川の渡　新潟県直江津の港？
このの一行は船でさらに北へ向ったのである。



歌舞伎「勧進帳」は義経奥州落ちの種々の挿話を脚色して創られたものだが、ここ石川県能美郡安宅町には、それを記念して「勧進帳」の二人の主役、弁慶と富樫介の銅像が建てられている。

の動静は明かでないらしい。その空白を『義経記』が埋めている。まず牛若は遮那王と名を改め、金商人の吉次について奥州にくだるのだが、途中鏡の宿では強盗由利太郎、藤沢入道等を退治（今では一般に熊坂長範といわれている）、熱田の前大宮司の前で元服して左馬九郎義経となり、上野国板鼻で野盗を働いている伊勢三郎を家来にしたうえ、奥州平泉の藤原秀衡の許に赴いてその庇護の下に入る。義経が秀衡の翼の下にかくれていたことは事実だろうが、しかし鞍馬を出奔してから旅の途上で継起する事件は、この物語の語られた室町時代の空気を反映してか、チャンバラが多く、歴史的事実としては信憑性に乏しいのではないか。刀をふりまわす義経じしんもあまりにチンピラじみていてリアリティに欠けている。このことは、鬼一法眼や弁慶との出会いにおける義経も同様であろう。

それに一たん奥州に赴いた義経が、また京に舞いもどったことはありえないことではないとしても、ここで兵法書六韜十六巻を手に入れるために陰陽師で文武二道に通じた鬼一法眼の家に住みこみ、その娘をたらしこんで、秘蔵書を手に入れる話など、すでに軍記物語が武士の世界をはなれて、瞽女か唱導師かによって一般百姓や町住居の雑階級の間に流れて、お伽草子化が進んでいることを示している。だいたい六韜三略にせよ孫子にせよ、兵書として今も学ぶにたることが記述されていて、武人とりわけ指揮官に、読みかたによっては、適切な教訓と参考とを供するだろうが、しかし摩訶不可思議の霊験をもったおまじないの本ではない。そのような本を入手するために、女たらしまでやるのは、お伽噺にほかなるまい。次に登場する弁慶にしても同様で、為朝や義平の豪勇ぶりに多少の誇張はあってもリアルな世界からとびはなれていないのにたいして、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com